

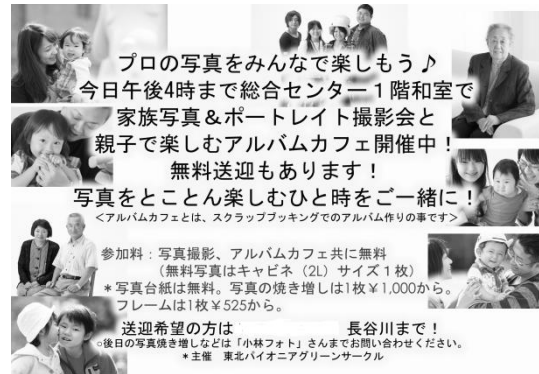
野田村支援・交流活動報告（2011年10月29日）

弘前大学人文学部ボランティアセンターの関与する25回目のバス運行で、大学を7時20分過ぎに出発し、比較的多くの参加者（計39名、内訳は男性9名・女性30名、弘前大学生29名・同教員1名・市民9名）を乗せて、晴れ渡った青空の下、野田村へ向かいました。活動内容は、押し花作り（2週間前の回の継続）、ペットボトルロケット製作と打ち上げ、仮設住宅訪問兼りんご配布、写真撮影会・アルバムカフェのサポートの4つで、参加者に希望をとったところ、ちょうどバランス良く分かれました（それぞれ、8、7、8、16名）。

今回は、前回押した花で葉などを作りたいという現地のご要望を受けて、前週の半ばに急遽予定が組まれました。せっかくバスを出すので、あわせて子ども向けのペットボトルロケットと、仮設住宅でのりんご配布を実施することにしました。後者は、市民ボランティアの成田さんのご尽力で、市内の農家よりジョナゴールド2箱の無償提供を受けて実現したものです（この場を借りて感謝申し上げます）。さらに、チーム北リアス（野田村支援・交流の広域ネットワーク）のメーリングリストで、活動予定日に、東北地方の写真館経営者約70人からなる東北パイオニアグリーンサークル（東北PGC）の企画で、弘前市の長谷川写真館の長谷川さんが無料撮影会とアルバムカフェ（写真をスクラップブックに切り貼りする交流作業）を行うことが分かり、サポートさせていただく運びとなりました。



道の駅「おりつめ」にて



写真撮影会とアルバムカフェの告知

10時30分頃に野田村役場前に到着し、午前中は各班で午後の活動準備などにあたりました。押し花班は、前回押したままになっていた花を広げる作業などを行い、ペットボトルロケット班は、ロケット打ち上げ会場の下見のため（？）海岸沿いを散策し、出あった住民の方などにお話を伺いました。仮設住宅訪問班と写真班は、泉沢地区仮設住宅を訪問してりんごの配布を行った後、昼頃に学習発表会が終わるという情報を得た野田小学校へ、ペットボトルロケットと写真撮影会・アルバムカフェのチラシ配布のために向かいました。

野田村には、計5ヶ所に213戸分の仮設住宅があり、泉沢地区はその一つです。同地区は、木造39戸（空室を含む）からなり、7月から被災者が居住しています。チームオール弘前では、引っ越しサポート以来の訪問でした。のんびりした静かで自然豊かな土地ですが、近くの海岸沿いには津波に洗われて荒涼とした風景が広がっています。小学校の企画に足を運ばれていたためか、ご不在のお宅が多く、配布したりんごの数は限られました。



泉沢地区仮設住宅から野田小学校へ



野田小学校前にて「出待ち」

○ 仮設住宅でのりんご配布（泉沢地区農村公園仮設住宅にて、執筆担当：角田美沙子）
インターフォンがないため、ドアをノックし、大きな声であいさつしながら在宅を確認し、りんごを1個ずつ手渡ししました。

年配の方が留守番をしているようで、中の動きが分かりづらく、また入口まで出てきてくれるまで時間がかかることがあり、自分たちが気持ちの余裕をもって接するという心構えが、相手に安心感をあたえ話しあえる環境を作っていく要因になると思われました。りんごはたった1個ずつでしたが、喜んでいただけたと思います。



お弁当



食後に容器を洗う

昼食は、いつもお世話になっている「かまどのつきや」で、地元の野菜や焼き魚とおにぎりのお弁当、おはぎと寄せ豆腐をおしくいただきました。食後は、家主の方の依頼により、男子学生は冷蔵庫の入れ替え作業を手伝いました。野田小学校の学習発表会は昼までに終わらなかったため、一般参加ボランティア4名には小学校前に残ってチラシ配布を継続していただき（お疲れ様でした）、後でお弁当を届けました。

午後は、4班に分かれて支援・交流を行いました。各班の活動概要は以下の通りです。

① 押し花づくり（清野鍼灸医院にて）

参加者は、前回の20名ほどから25名ほどに増え、押し花を添付した葉書を1名あたり

5枚作成しました。見事な出来栄で、弘前からの専門ボランティアも、参加者の美的感覚の凄さに驚いていました。後半は、一緒にお茶を飲み、唄を歌って交流をはかりました。

② ペットボトルロケット（野田村消防署前にて、執筆担当：南部真人）

僕はこの日、初めてペットボトルロケット飛ばしの班に加わりました。10時半に役場前に到着し、活動は13時から。午前中は特にすることがなかったので、班の7人で海岸沿いや村の中を散策することにしました。すると、建物が流されて更地になっている場所に1人のおじいさんがいました。声をかけてみると、そこは元々ご自身が住んでおられた場所で、今は大根や白菜などが植えてある畑になっていました。現在は仮設住宅にお住まいで、毎日自転車で畑の様子を見に来るのが日課になっているそうです。しかし、塩害の影響で作物はうまく育たず、しかも地面には津波で流されてきたと思われるゴミやガラスなどがいまだ散乱していました。「困っていることはありませんか」と尋ねると、「困ったことだらけだ。でも頑張るしかない。こうして毎日畑に来て体を動かしているんだ」と話してくれました。

午後の活動はペットボトルロケット。早いうちから5、6人の子どもが集まり、一緒に製作しました。完成していざ飛ばそうとしたのですが、飛ばず、水も空気も漏れます。子供たちのうち2、3人は、愛想を尽かして帰ってしまいました。やっと飛んだのは終了30分前で、そのときは子供達と一緒にみんな大はしゃぎでした。こんなに野田村の子どもたちと一心同体になれたのは初めてです！途中で帰ってしまった子どもたちに本当に申し訳ないと思いますが、最後まで付き合ってくれた子どもたちには感謝しています。



津波で洗われたかつての住宅地



ペットボトルロケットで遊ぶ子ども

③ 仮設住宅でのりんご配布（野田中学校仮設住宅にて）

午前の泉沢地区に続いて、13時過ぎから、野田中学校グラウンドの仮設住宅で、りんごと写真撮影会等のチラシを配布しました。入居は5月中旬で、すでに5ヶ月経過しています。りんご箱2つからりんごを取り出して、配布用のビニール袋に詰める作業から開始。事前に仮設住宅内の自治会長にあいさつするために仮設住宅の敷地に入ると、集会場近くに人が集まっています。何ごとかと思いきや、弘前市の個人が寄付した衣類等を、泊りがけで野田村に入っていた大阪大学サークル「すずらん」のメンバー数名が、床に敷物を広げて配布する手伝いをしているところでした。他の仮設住宅の居住者も集まっていたとのこと。

その後、2人一組で22棟（128戸（空室含む））を訪問しました。3軒に1軒ほどの割合でご不在でしたが、在宅の方にりんごを1、2個お渡しし、笑顔で受け取っていただきました。「夕食後にいただきます」とおっしゃる方もおり、りんごの人気ぶりを実感しました。



野田中学校仮設住宅



集会場入口のホワイトボード

写真撮影会・アルバムカフェのチラシもあわせて配布したところ、私が10軒程度回った中で2軒の方から、知らなかった、良い企画で写してもらいたいけれど今日は予定が合わなくて残念、との声が聞かれました。入居者は、津波で家が損壊し、写真やアルバムが流された方がほとんどで、新たに写真を残したい、遠方の親族等に自分や家族の写真を送付して元気な様子を見せたいなどの言葉からは、写真撮影のニーズの高さが窺われました。

りんご配布終了後、入居児童と遊んでいた学生ボランティアを除いて、仮設住宅集会場に見学を兼ねて立ち寄りしました。入口のホワイトボードには、11月の予定が書き込まれつつありました。写真撮影会・アルバムカフェも、この集会場での開催が当初構想されていたものの、正式な予約が一步間に合わず、他の団体に先を越された経緯があります。

集会場では、町内会長の奥様を含む仮設入居者の方々と、「すずらん」の大学生数名が語らっていました。その輪に混ぜてもらい、何とはなしに以前から気になっていた集会場の企画の多さについて感想をうかがったところ、仮設入居者のお一人は、仮設住宅にいても天井は低いしやりきれないので、集会場で色々な企画があり参加することは気晴らしになっている、とお答えになりました。ただし、入居者により、性格が外交的か内向的か、また被災状況などによりとらえ方は様々で、中には企画の多さに辟易している方もいるかもしれない、とのことでした。あくまで仮設住宅入居者の方々等の任意で関心ある企画に気軽に足を運べるような、集会場の開放的な雰囲気作りが重要ではないかと思われました。

「すずらん」の学生や地元の方と語っている間に、町内会長の奥様より、カルピス、コーヒーとお菓子をご提供いただき、加えて帰りのバス車内で食べるようにとお菓子を持たされ、かえってお気遣いいただく結果となってしまう、恐縮しました。

- ④ 写真撮影会・アルバムカフェ（野田村総合センター1階にて、執筆担当：角田美沙子）
センター内で受付を行い、屋外でプロのカメラマン（長谷川さん）による写真撮影があり、スタッフが村の写真屋さんまで走っていき、現像してセンターに持ってきます。

写真ができてくると、フレームに入れた写真が1枚家族に手渡され、子どもたちのスナ

ップ写真が何枚か渡されます。子どもたちは、それぞれ自分の写真を思うがままに切りとったり、カラフルなテープ、模様の入ったテープを台紙に貼ったり、カラーペンで好きな文字、絵を書いたりしながら、アルバム作りを行っていきました。子どもたちはボランティア学生などと一緒に、個性的なとても素晴らしいアルバム作りを楽しんでいました。最初は不安で表情の硬かったように思われた方々は、できあがったアルバムを見て、とても嬉しそうで、楽しそうで、笑顔を見て帰ることができ、私たちも、楽しい時間、またほっとする時間を持つことができたような気がします。



写真撮影会場受付サポート



長谷川さんによる屋外撮影風景



アルバムカフェ風景



当日の撮影参加家族は 22 組、アルバムカフェ参加家族は 18 組（アルバム作成は 30 枚 + α ）に上りました。アルバムカフェは、被災地では野田村と宮古市で意外にもこの日初めて開催されたようで、今後の展開が期待されます。

終了予定時刻の 16 時に近づいても、撮影待ちの親子が何組かおり、いたたまれなかったものの、帰りのバスの時間の関係で、チームオール弘前のボランティアは途中で撤収し、帰途につきました。夕闇に包まれる車内で、参加者の多くは眠りに落ちていきました。

「おりつめ」で休憩をとった後も、眠そうな人が多かったものの、バス車内でマイクを回して一人一人に活動を振り返ってもらう、恒例の「感想」コーナーを決行しました。



当日の写真撮影会での写真の数々（撮影と写真提供：長谷川正之）

押し花班からは、花があまりに色鮮やかだった、皆の満足気な顔を見て嬉しくなった、自分で作る喜びがあるように見えた、「こんなに素晴らしいことは初めて」と5人から言われた、皆さん楽しそうにうきうきしながら押し花を作っていてこちらも嬉しくなった、一瞬でも震災のことが忘れられるような感じになった、表面的は明るくても「気持ちは被災者」と打ち明けられた、「ふるさと」をどんな思いで歌っていたのだろう、などの言葉が聞かれました。前回に続いて押し花に参加した学生からは、「今回は自分から地元の人に話しかけることができるようになり、我ながら成長したなと感じた」という声もありました。

ペットボトルロケット班からは、ロケットを飛ばすときに子どもが生き生きとしていた、前回よりも子どもが集まったのになかなか飛ばず悔しかった、といった感想が聞かれました。なお、ペットボトルロケットがうまく飛ばなかった理由は、これまでリーダー格だった学生が所用により不参加だったことに加え、これまでの活動で飛ばし過ぎて機材の調子が悪くなっていたためようです（次回に備えて発射台を買い替えることにしました）。

写真撮影およびアルバムカフェのサポート班からは、写真を撮った後の子どもがとても嬉しそうでお父さんも喜んでいて、保護者や子どもの笑顔を見ることができて嬉しくなった、とても良い取り組みと思ったなど、好意的な声ばかりでした。「お父さんと1歳くらいの男の子が来て何とも言えない（暗い）雰囲気でしたが、写真を撮った後、子どもはとても嬉しそうでお父さんも喜んでいました。カメラマン（長谷川さん）がよく声をかけてとても素敵な写真が出来上がっていききました。こういうちょっとした触れ合いがとても大事だと思います」、「子供の相手をしてもらい助かると母親に言われて、子どもと一緒にいるストレスが震災で増しているのかもしれないと思いました」という声もありました。

仮設住宅りんご配布班の参加者からは、りんごを受け取ってくれる人が笑顔で喜んでくれたので配って良かった、「いつもありがとう」と感謝された、「今日も来てくれたんだね」と言われて弘前大学の黄色いジャンパーの重みを感じた、継続がこういう風につながっていくと実感した、子どもと遊んで自分の方が元気をもらった、打ち解けた雰囲気が作れず会話があまりできなかった、「津波で流された場所には行きたくない」と言われていまだに大きな傷跡になっていると感じた、心に穴の開いたような寂しい気持ちになった、津波の話に戸惑ったが聞いてあげることも大事だと思った、りんごをあげて「すみません」と言われた時は複雑な気持ちになった、もう一度野田村の方の心と感じ方を考えたい、りんごの数が足りなかった、家族の人数分を準備したい、などの感想や意見が寄せられました。

以上の通り、今回の野田村訪問では、4つの多岐に渡る活動を滞りなく終えることができました。押し花は、参加された住民に大変好評だったようでした。ペットボトルロケットと写真撮影・アルバムカフェは、小学校での告知効果もあって人が集まり、仮設住宅のりんご配布も、居住者に喜ばれるとともに交流の糸口となりました。学生および市民ボランティアにとっても、今回の活動は、被災者と出会い、話し、交流することを通じて、その心のありようや自身の関わり方などを考える契機になったようです。ただし、りんごの数は、訪問時の「ささやかな手土産」ではあるものの、配布するからには、ある程度の量を不在者宅の分を含めて用意してもよかったかもしれません。弘前市と野田村の支援・交流が、試行錯誤を重ね、あり方の吟味を続けて、今後もいっそう進展することを願います。

（担当：飯考行、角田美沙子、南部真人）